

高校生 の部

自分たちの活動を通して、今、私が思うこと

高原高等学校 一年 皿良 舞

「今、あなたができることは何ですか？」

私は車の運転ができません。私は人に分けてあげられるお金もありません。私は、普通の高校生です。でも無力ではありません。私は考えることができます。この一年間で、考えて行動することができるようになりました。

一年前、宮崎県で口蹄疫発生。街全体が白い石灰で覆われました。私が学ぶ高原高校の敷地内にも、牛や豚が飼育されています。毎日正門前で車両消毒にあたる先生方や生産流通科の先輩たちの姿を見て、何もできない自分が歯がゆくて仕方がありませんでした。

そのような中、食品化学科の先輩たちから、「口蹄疫で苦しんでいる農家の人たちのために、ビスケットを製造し、売上金を義援金として提供しよう。」という提案がなされました。私は、初めて人の役に立てると思い、その活動に参加しました。他にも多くの友達や先輩たちが参加し、私は、自分と同じように感じている人がたくさんいるんだと嬉しくなりました。入学したばかりの私たちは、

どのようにビスケットを製造するのか分かりません。先輩たちに尋ねながら、美味しいビスケットを焼き上げることができました。そして、自分たちの気持ち伝わるようにと応援メッセージを書いたラベルをビスケットの袋一つ一つに丁寧に貼り付けました。「口蹄疫で大変な中、少しでも力になりたいと思います、義援金活動をしています。口蹄疫に対して、今、私たちができることをやっていますように。」

五月末の土曜日、高原町内で販売しました。最初は、「ちゃんと売れるかなあ」と不安な気持ちでいっぱいでした。けれども、次々にお客さんが来てくれました。「お釣りはいらさないから義援金の足しにして下さい。」と言って下さる方もいました。お客様の「口蹄疫の被害を受けた人たちのために何かしたい。」という思いを、私たちが製造・販売したビスケットにのせることができたことで、人のために役に立てるという自信を深めることができました。

やがて、口蹄疫も収まり、宮崎県が少しずつ元気を取り戻してきた矢先の一月二十六日、今度は新燃岳が噴火しました。噴石や灰が大量に振り、私が暮らす高原町は、空も地面も灰色に染まりま

した。火砕流や土石流から身を守るため、親戚やクラスの友達は避難を強いられました。いてもたってもいられず、「またビسケットを作って避難所に届けよう、義援金を集めよう！」そう思いました。けれども、相談した先生がおっしゃった言葉は意外なものでした。

「避難所の人たちは、本当にビスケットを必要としているのか。」

「お金を必要としているのか？」

「舞、おまえは実際に避難所に行ってみたかよっ？」

避難所になっている「ほほえみ館」は学校から自転車で十分ほどの距離。足を運んでみると、ホールや廊下は、毛布を敷いて不安な時間を過ごす人たちであふれかえっていました。同時に、大量のパンやおにぎりが積み重ねられているのにも目にしました。噴火から約一週間。すぐに様々な支援物資が全国から届けられていました。避難所で必要とされていたのは、物やお金ではありませんでした。「現場を見て行動しろ。」

「人に尋ねず自分で何ができるのかを考えて行動するのがボランティアだ。」という先生の言葉が

頭をよぎりました。

私はクラスの友達と約二週間、毎日、学校が終わると避難所に行きました。そこで、足が不自由なおじいちゃんに食事を運んだり、おばあちゃんの話し相手になったりしました。皆さんが笑顔で「ありがとねえ。」と言って下さったので、逆に元気をもらうことができました。活動する中で、福岡県の報道カメラマンの方とも話をしました。その方は、新聞を通して多くの人に現状を伝えたいと熱く語ってくれました。

多くの出会いを通して、あれもこれもはできないけれど、一人一人が自分の立場でできることをすればいいと気が楽になりました。

三月、避難が解除になり、噴火が少し落ち着いたら頃、私たちは再びビスケットを作りました。そして、昼夜を問わず、支援物資の取りまとめや被害者の救済にあたって下さった役場の方々に届けに行きました。

「いつもありがとございます。共に頑張りますよう！」とメッセージをつけて。

梅雨の時期は過ぎましたが、新燃岳周辺では土石流の危険性が今なお続いています。少し離れた

東北、遠く離れたニュージーランド、世界各地でも災害と闘っている方がたくさんいらっしゃいます。

高校生の私ができることは限られています。

けれども、何が必要か「見極め」「考え」「行動する」ことができます。小さなことから始めるボランティア。

人のためではなく、自分が成長するためにとって、今後も自ら考え行動を起こしていきたいです。

「今、あなたができることは何ですか？」



新燃岳の噴火を通して分かったこと

高原高等学校 三年 松田 裕司

一月二十六日、五十二年ぶりに新燃岳が噴火を起こしました。その時は、私たちは修学旅行で福島県に行っており、新燃岳が噴火したことを知ったのは夜中になってからでした。

いきなりの校長先生からの報告に、私たちはとても驚きました。高原町に住んでいる人が少なかつたせいか、周りからは「ちゃんと宮崎に帰ることができるのか。」「どうやって宮崎に帰るのか。」という不安の声が聞こえてきました。私は、噴火は火山灰が降っているだけで大したことではないだろうと思い、帰宅の心配ばかりをしていました。そのため、先生から家に連絡を取るようにならわれていましたが、連絡をしないまま寝てしまいました。

次の日の夜、噴火のことがニュースで取り上げられるのではないかと思ひ、友達とテレビの前に集まりました。今になってみれば、本当にただの興味本位でしかなかったと思ひます。案の定、新燃岳はニュースに出ました。しかし、テレビに映ったのは、私達が想像していたのとは違って、真

っ赤な火口に火山雷が激しく落ちている光景でした。あまりの衝撃に言葉が出ず、「高原は大丈夫なのか。家族は大丈夫なのか。」という思ひで頭の中はいっぱいでした。心配と不安とに駆られた私は、家に電話をしようと思ひ、一階の公衆電話まで走っていききました。すると、私と同じようにニュースを見たのでしよう、沢山の高原高校生が電話の前に列を作っていました。私に順番が回ってきた時には夜遅くになっていたので、家族は無事なのかということだけを聞きました。火山灰はすぐ降り積もっているが、幸いなことに家族は全員無事だということを知り、安心して部屋に戻ることができました。

修学旅行が終わり高原町に帰ってみると、辺り一面が火山灰で埋もれていました。視界も悪く、硫黄の臭いが充満していました。家に帰り着くと、家の庭や屋根も火山灰まみれで、これからの生活はどうなるのだろうか、再び不安な気持ちになりました。

実際に、火山灰のせいで、洗濯物を外に干せない、窓を開けられないなど、日常生活で当たり前になっていたことができなくなりました。学校でも、ヘルメットを着用したり、学校行事が中止になっ

たりと、大きな影響を受けました。また、高原高校の生徒の中にも、避難勧告を受けて避難所に避難している人がいて、「毎日が大変で、早く家に帰りたい。」と言っていました。

新燃岳の噴火を通して、自然災害の怖さと日常生活を取り戻すための大変さが身にしみて分かりました。加えて、普段の生活のありがたさや生きているということ、命の大切さが本当に実感できました。また新燃岳が大きく噴火するかは分かりませんが、今回の噴火を教訓にしながら、これからの生活を送ってゆきたいと思います。



教職員の部

新燃岳の噴火

高原小学校 校長 川崎 明広

「ズズーン」

平成二十三年一月二十六日、水曜日、午後三時四十分、隣でガス爆発が起きたような音とともにガラス窓全部が異様に振動した。音のした方向にただ事ではない気配を感じておそろおそろ出てみた。

玄関を出て、中央公民館の屋根の上方、そこには信じられない光景があった。すぐ、目の前の霧島連山の一角が噴火し、噴煙を黒々とあげている。学校と地続きのすぐ前の山が噴火している。

背筋が凍った思いがし、今後どうなるのか思案が頭を駆け巡った。

まもなく、臨時校長会が招集され、今後の対策が話し合われる。

この日は、一晩中、爆風と振動が続き、午前三時頃には頂上付近で火砕流のようなものが見えた。朝五時ごろ学校にいたら一旦噴火が止まった。

一月二十七日 木曜日、風向きがこちらに変わり火山灰が降りそそいだ。周り全てが真っ白になり、車を運転しても舞い上がる火山灰でよく前が

見えない。翌日は臨時休校となった。

一月三十日 日曜日、真夜中の十二時、臨時校長会が役場対策本部のすぐ横の会議室に招集され、狭野地区に避難勧告が出たことが伝えられる。児童生徒の安全を第一に、明日は臨時休校と決定した。

この日の噴火は、特に激しく、噴火口からは赤い溶岩が噴出し、噴石が飛び、雷が数十本も火口と上空の噴煙の中を縦に走った。ガラス窓が空振で割れないか心配な程、揺れ続けた。

いろいろなることを経験するが、噴火への対応策については想像すらしたことがなかった。噴石がどの程度あるのか、火砕流の発生はどこまで来るのか、綱渡りの日々であったが、人的な被害を受けた児童生徒が一人もでなかったことだけが唯一救いであった。



新燃岳噴火に思う

高原小学校 教諭 杉山 真一

一教諭として、新燃岳噴火を体験した。

轟音、地響き、降灰。真冬の出来事であった。学級通信からの抜粋である。

「狭野小学校の子ども達と一緒に学習することになりました。となりの図工室に四年生が十五名ほど、担任の先生とやって来ました。」

「昨日に引き続き、牛乳、パン、バナナ、デザートでした。お腹が空いていたこともあり、ペロリでした。早く給食室も復旧するとよいです。」

「噴火の後、『雨かな。』というようなパラパラという音。どうやら細かな石が少し、高原小まで届いたようです。できるだけ教室の中央に寄って学習するように呼びかけたところでした。」

「『先生、体育がしたいよ。』『先生、校長先生に相談してください。』：：返答に困ってしまいました。自分もそうでしたが、子ども達の、学校で運動がしたいという思いは切実ですね。」

子ども達と毎日を過ごしながら、新燃岳への脅威と、諸支援の頼もしさを知った。どちらもこの地に生きていてこそ感じることできた想いであ

る。

それ以上に強く実感したことがある。子ども達の輝きである。噴火と降灰に直面しても、それを受け入れ、しっかりと適応した子ども達の輝きである。あの状況のなかで、大人の不安をよそに、食べて、遊んで、学んで、歌を歌ってみせた子ども達のあの輝きと尊さは何ものにも代え難い。こんな子ども達に、明るい将来がないはずはない。

活動の終息を待ちながら、私は現在も、そんな子ども達の前に立っている。私は、この子ども達に寄り添い続ける。

困難を受け止め、今もなお真っ直ぐに日々を過ごしている高原の子ども達である。雄大な自然に抱かれながら、きっと力強く生き抜くと信じている。



新燃岳噴火に通して

高原小学校 教諭 瀬戸山 剛介

普段は、きれいで堂々とした山が、まさかあんな風になるなんて思いもよらなかつたというのが、正直な気持ちだった。

二〇一一年一月二十六日、新燃岳が大きな煙とともに爆発した。前日の夕方、夕焼け色に染まつた景色の中に、一際目立つ黒い煙。そして不気味な光を放つ火山雷。しかし、それ以外は何も変わらず、周りの職員も、

「すごい煙だね。」

と甘い気持ちで軽く見ていたのを覚えている。最初、火山灰の影響がなく、これでおさまったばかり思っていた。しかし、出勤途中、車を進める中で、私は、辺りがだんだんと灰で見えなくなっていく恐怖に襲われた。車のワイパーとライトを使って車を進めるが、対向車が見えず、どうしていいか分からなかつた。学校に着いても、昨日の景色とは違って、硫黄のにおいで頭がくらくらした。

「さあ、どうしよう。」

と思つたが、とりあえず教室へと足を運んだ。

「これは、そうじをしなきゃ。」

灰まみれの教室を見渡し、愕然とした。しかし、いつまでも立ち止まるわけにはいかず、できることをやるしかない気持ちでいっぱいだった。

子どもたちが登校して、生活はがらりと変わった。今までできていたことができなくなるという不安はたくさんあったが、こんな時だからこそ助け合いたいと思ひ、精いっぱいのことをしようと思つた。一番、強く感じたのは心のケアだった。新燃岳の復興の最中、多くの支援物資や励ましの手紙が届く中で、私が教わつたもの、それは、「感謝の心」だった。人間はみんな助け合い。困った時はお互い様。全国の人たちの支えで今を生きていける幸せをしっかりとかみしめて生きていきたい。



経験を生かして

広原小学校 教諭 園田 祐一郎

一月二十六日水曜日の放課後、新燃岳が爆発的噴火をした。噴煙は、山から南の空の方へもくもくと移動し、まるで龍がうごめいているように見えた。噴火はなかなか収まらず、日が暮れてくると噴煙の中で雷が光っているのが見えて、恐ろしくなってきた。

夜中の二時半頃、空振で目が覚めた。家の窓から新燃岳の方を見ると、山が赤くなっていた。ますます恐ろしくなった。

次の日、空振は収まり、学校は普通に行われた。地域の業者からドーナツツやパンの支援品をいただいた。

その次の日、噴火が続いていたので学校は臨時休校となった。校区内の様子を見て回ると、まだ広原小学校の周りは普段と変わらなかったが、温谷方面へ行くと火山灰が降り積もっていて、状況は一変していた。その後、高原小学校区に車を進めると、火山灰が舞って、ライトをつけても前は見え、車がどこから現れるか、どこを走っているかがわからず怖かった。

次の週には学校が再開した。しかし、登下校は保護者による車の送迎が続き、マスクは常時着用で、運動場では遊べない日々が続いた。給食室には火山灰が入って調理ができない状態が続き、簡易給食となった。

しかし、そんな中、人の温かさを感じたのも事実である。日本各地から町に支援の品が届き、学校にも届けられた。運動場には国土交通省の道路清掃車が来て、火山灰が除去された。遠くの友だちからも、無事になっているかというメールをいただいた。子どもたちと頑張っているかという気持ちが高まった。

自然災害はいつ起きるかわからない。だからこそ、この新燃岳の経験を生かして普段から備えをしていかなければならないと強く感じた。学校として何ができるのか、みんな考えてしっかり備えていきたいものだ。



あの日、あの時

狭野小学校 校長 原田 敏彦

一月二十六日（水曜日）、午後三時四十分、職員会議中のことである。「ゴゴゴーツ。」という地鳴りとともに新燃岳が大爆発した。屋外に飛び出し山を見上げると黒々した噴煙が高々と舞い上がり、本校の上空をかすめるように都城・日南方面へと流れている。まだこの時点では、「噴火したか。」という程度の認識でしかなかったが、日増しに「ゴゴゴーツ。」という地鳴りが強くなり、絶え間ない「空振」で窓ガラスがガタガタと鳴り続けた。

そして、三十日の深夜。町教育委員会より、携帯電話に狭野地区に避難勧告が出され、狭野小学校が学校閉鎖されたこと、校長は役場へ集合との連絡が入った。直ちに職員へ自宅待機の指示を出し、自分も必要なものを車に詰め込んで役場へと向かった。玄関を出て山を見上げると稜線が真っ赤に染まっている。溶岩が今にも住宅まで流れて来るような錯覚に陥り、恐怖心がふつつつと沸いてきたことが昨日のように思い出される。

翌三十一日は臨時休校が決定。職員には町中央

公民館に集合するように指示を出し、公民館の一室を借りて職員会議を行った。まずは子どもたちの安否の確認をである。自宅に二十一人、避難所（ほほえみ館）に十一人、親戚の家などに二十四人が身を寄せ、全員の無事が確認でき、一安心した。

その後、臨時校長会にて本校の授業再開について検討され、教室は高原小から空き教室や特別教室を学年毎に提供してくださる申し出があり、二月一日より授業が再開できることになった。それに伴い本校の職員室を高原小学校の二階に移すことも決まった。

避難勧告が一時解除になったところで、パソコン、コピー機、印刷機など、職員室・事務室の機能を全て高原小へ移し、この日から景色も気持ちも灰色に染まった間借りの学校生活がスタートしたのである。

子どもたちは、高原小の子どもたちと直ぐに仲良くなり、友達が増えたと喜び、笑顔も見られたが、夜ともなると地鳴りや轟音のため眠れない、怖いなどという不安を訴えた。もちろん、職員にも次第に精神的・肉体的疲労が積み重なっていった。

保護者も不安な日々が続いたと思われるが、毎

日の子どもの送迎には学校の指示通りに協力し子どもの安全を確保してくださいことや、本校再開に向けた降灰除去作業には、自宅より学校を優先させて取り組んでくださったことに深く感謝する次第である。

また、降灰除去作業には各方面からたくさんの方々が駆けつけてくださったことに対しても深く感謝する次第である。

幸いにして二週間で本校に戻ることができた。現在も噴火は継続中で予断を許さない状況であるが、学校は以前のような平穏な日々を取り戻し、校庭には子どもたちの元気な声が響いている。



新燃岳噴火に際して

狭野小学校 教頭 柳田 宏一

一月二十六日水曜日、午後の職員研修の時間に轟音が聞こえ、校舎から出てみると矢岳の向こう側から黒煙と火柱が上がっているのが見えた。噴煙はやがて風に乗って都城方面に流れはじめた。この後、学校や子ども達に大きな被害が出なければよいことを祈りつつ、不安を感じた。

翌日の通勤途中は、学校に近づくにつれ、降り積もった灰がだんだんと厚みを増し、離合する車の巻き上げる灰で前が全然見えなくなり、運転をするのにも苦勞した。子ども達は無事に登校できるか不安になった。出勤後、校長と校区内を見て回ったが、特に北狭野、南狭野周辺は降灰がひどい状況であった。

午後から再び爆発的噴火が起こり、噴煙は学校の方へ迫り、数分後には学校上空は黒く覆われて辺りが薄暗くなった。学校から新燃岳を見ると、真っ赤な火柱が上がり、噴石が放物線を描いて山腹に落ちていた。時折電光が噴煙の中から見えていた。この噴火のため翌日は臨時休校になった。

さらに日曜日の深夜、校長からの電話で狭野地

区に避難勧告が出て学校は閉鎖されたため、翌日職員は中央公民館に出勤の連絡をするよう指示があった。

月曜日は中央公民館、火曜日からは高原小学校に間借りしての授業再開で、これからいつまでこんな状況が続くのか不安でいっぱいだった。職員も不安だったろうし、児童は、家族で避難生活を始めた者や空振や鳴動で夜に眠れない者がでるなど、本当にきつかっただろうと思われる。

幸い、十日後には狭野小学校に戻れて授業を再開できた。短い期間で終わって良かったが、噴火の際の諸問題への対応の仕方については、この貴重な経験を踏まえて実践的なマニュアルを作成することができた。いまだに新燃岳の噴火活動は終息していない。気を引き締めて常に災害に対応できるよう、避難訓練等の実施や危険箇所那点検などに力を注ぎ、万が一の事態に備える体制を取れるよう心がけている所である。

感謝・感激・感動の卒業式

狭野小学校 教諭 雪丸 正子

新燃岳大噴火後、「学校閉鎖」となり、授業再開を心配していた一月三十一日。

しかし、翌日二月一日から高原小で授業再開ができ、子どもたちの元気な顔が教室にそろいました。この時、当たり前前に学校に登校し、教室で授業できることのありがたさを子どもたちと共にかみしめました。教室を準備していただいた高原小の先生方に感謝の気持ちでいっぱいでした。

でも、いつまで高原小での授業が続くのだろうか、いつ狭野小で授業が再開できるのだろうかと心配が続きました。六年担任として卒業生を狭野小学校から送りたいそんな思いがありました。子どもたちも同じ思いでした。

そんな中、いつ、どこで卒業式があっても、狭野小学校の卒業生として恥ずかしくない卒業式を送ろうと、子どもたちと心に決めました。その日から、子どもたちは、ほほえみ館や親戚の家で、卒業生の言葉の練習を始めました。みんな熱心に取り組んでいました。

二月十四日、狭野小学校の授業再開、子どもた

ちにとっても私たち職員にとっても忘れられないうれしい日が来ました。自分たちの学校で卒業式の練習が出来る。そして、卒業式が体育館でできる喜びは、一生忘れることはできません。

また、全国や県内からたくさんのお手紙や支援の品物を頂きました。これらのものが届くたびに、子どもたちと日本の皆さんのやさしさ、温かさが心にしみました。特に、福岡県久留米市立宮ノ陣小学校の六年一組の皆さんから頂いた手紙は、同じ卒業生としての気持ちが綴ってありました。卒業まで頑張ろう、新燃に負けないぞという元気をもらいました。

卒業式は、狭野小学校で無事迎えることができました。卒業生十四名は、卒業生の言葉の中で、新燃岳の噴火で、高原小で勉強したこと、全国の皆さんから頂いたやさしさは、一生忘れないことを述べました。私にとっても二十二年度の卒業式は、たくさんの方々の皆さんのおかげで、卒業生を送ることができ、感謝、感激、感動の卒業式となりました。十四名の卒業生は、心優しいすばらしい人として成長してくれると思います。たくさんの方々の皆様の支援、本当にありがとうございます。

新燃岳が教えてくれたこと

後川内小学校 講師 檜畑 文範

一月二十六日、私たち職員は、

「新燃岳噴火により、学校に残っている児童生徒を直ちに帰宅させるように。」

と連絡を受けた。慌てて外に出て空を見上げると、新燃岳方面から黒い噴煙が空高く舞い上がっており、ただ事ではない脅威が迫ってきていることを感じた。

その影響は想像以上の大きさだった。校庭には火山灰が積もり、校舎内にも灰が入り込んでおり、通常の学校生活を送ることが困難な状況になった。

私自身、噴火によって普段とは違う生活になり、落ち着かない日々を送っていた。しかし、数百年に一度の火山の噴火を身近に体験していることが、日が経つにつれ実感するようになった。子ども達とともに灰の清掃作業をしながら、

「この機会に何か子ども達に教えられることはないか。」

と考えるようになった。

学校には灰から目を守るためのゴーグルや使い

捨てマスク、食べ物や飲料水など多くの方々の心遣いが届いた。そのことを子ども達に考えさせることが大事なのではないかと考えた。全国からの心遣いを伝え、感謝の気持ちをもたせ、それをお礼の手紙に表現させた。そのことを通して、子ども達に「感謝の気持ち」「人と人との絆の大切さ」について深く考えさせた。その成果か、東日本大震災の際に、子ども達から、

「困っている人の力になりたい。募金を送りたい！」

という意見がでた。それは、子ども達が学んだ「絆」の表れであった。

新燃岳噴火によって日常生活にたくさんの影響を受けたが、新燃岳噴火は子ども達に「人の思いやり」「助け合いの大事さ」「絆の大切さ」を力強く育んでくれた。

噴火の中の入学試験

高原中学校 教諭 川崎 彩

三メートル先も見えない灰の中、生徒の受検票を持ち、必死に車を走らせる。早く生徒の無事を確認したい、生徒の表情が気になる。生徒に会いたい一心だった。

平成二十三年一月末、空を見上げると灰色と黒色が混ざった不気味な噴煙があつという間に空に広がっていった。これからどうなるのか、どうすればいいのか、不安ばかり。まず考えたことは、三年生の入試のこと。数日後には私立入試が待っている。神経質になっていく時期の噴火。みんなは大丈夫だろうか、この空振の中、眠れていないのではないかと考えると、私もほとんど眠れない夜が続いた。

一月三十一日は臨時休校。そんな状況の中、家で一人で勉強している生徒を思うと、早く顔を見て少しでも不安を和らげてあげたいと思い、車を走らせ、一人一人の家や避難場所へ先生方と急いだ。避難場所へ行くと、多くの人が横になっていた。その中を通りながら中学生を捜した。私たちの姿を見ると嬉しそうに近づき、挨拶をしてくれ

た。不安や疲れが表情に出ているが、「大丈夫です」と元気に答える生徒たち。教師として、人として、今私には何が出来るか、何をしなければならぬのか考えさせられた。親戚の家に避難している生徒も多く、それでも迫る入試へ向けて気持ちを向ける生徒には本当に勇気をもたらした。

噴火という大きな出来事は、私に教師の使命と何かを考える機会となった。これからまた噴火が起こるかもしれない。そんな不安の中、高原町で生きていく生徒へ何が出来るか。何をしなければならぬのか。自分の命を守る生きる力を考えた。どんな状況においても、「命を守る強い心」、「どのようにして命を守るか」というスキルをしっかりと伝えることが大切ではないかと感じた。

また、日本各地からの支援を通して、感謝の心を伝えることも忘れてはならないと感じた。

第三コーナー

高原中学校 教諭 立野 和弘

高原中グラウンド、三百メートルトラックの『第三コーナー』。

雨が降ると、そこだけではなかなか水が引かない。一月二十八日の新燃岳噴火で降り積もった灰が犯人である。私はそのときの噴火の写真を持っている。高校時代の先輩が韓国岳に登山し撮ったものだ。「忌々しいやつめ!」、机の上の写真にときおりつぶやく。あのときから私と陸上部は苦しめられている。

五十二年前も新燃岳が噴火したらしい。親父に確かめに行くと、そのときの様子を語ってくれた。「ここ(小林)から見える山の中で、一番大きく見える山『ひなもり岳』が、噴煙でまったく見えなくなるぐらいだったんだぞ。お前が生まれる一ヶ月前やったかなあ。」と懐かしそうに……。私も五十二歳、ちよっと新燃岳が身近に感じられた。

壱岐に住んでいる大学時代の親友からも電話がきた。「大丈夫かい?」の久しぶりの声が懐かしかった。「おう、ジュラシックパークみたいじゃが。」と返答、そして十数年ぶりの会話がしげら

くはずんだ。

話のもとに戻す。水はけ抜群のスーパーグラウンド、アンツーカーの三百メートルトラックが……。もったいない。草抜きをすると、草と草の間にこっさり灰が今でも隠れている。練習でタイヤ引きをさせると灰が舞い上がる。「身体に悪いんじゃないか?」と、最近はあまりやらせてはいない。『第三コーナー』が、今も私と陸上部を苦しめ、あのときの噴火を忘れさせてはくれない。



新燃岳噴火に学んだこと

高原中学校 教諭 山下 直美

「噴火じゃない。」

「今までの噴煙と程度が違うね。」

一月二十六日の午後、それが新燃岳大噴火の前兆だとは思ってもよらないことでした。

その後、噴煙を吐く山を横目で見ながら、噴火が収まってくるまでの数ヶ月は、長年の教師生活で経験したことの無いものでした。

灰の侵入を防ぐために、各教室のカーテンは昼間もしっかりと閉められ、電灯をつけても薄暗さを感じる中で生徒は授業を受けていました。また、不思議なことに保健室利用者がいなくなり、テンションの高い生徒が増えているといった現象がみられ、養護教諭の先生が専門家の方々に「ストレスの現れです。」と言われたことが印象的でした。

この噴火で学んだことが二つあります。

まず一つは「防災意識をさらに高め、どう動くべきかを考えなくてはいけない」ということです。噴火が始まった時、雨が降って土石流が心配される時、生徒や保護者への対応を迷った場面がありました。家に帰すのか、学校に残すのか意見が分

かれたこともあります。学校だけでなく、地域・関係機関とも十分に話し合いを持ち、早急に対応策を練ることが必要だと思えます。

もう一つは、「人は人に支えられて生きている」ということです。全国から励ましの言葉、支援物資を始めとして多くの善意を頂きました。また、ベランダにたまった灰を手作業で除去してもらったりと本当にありがたかったです。普段あまり意識しない人たちのかかわりというものを強く感じさせるきっかけにもなってくれました。

生徒たちも、自分たちを見守ってくれている人がたくさんいることを感じとっていたようです。これからの生活で、学んだことを生かしていけるようにがんばりたいです。

新燃岳噴火から学んだこと・考えたこと

後川内中学校 教頭 馬場 伸介

「新燃岳が噴火しました。すぐに生徒を集めて、帰宅させるように。」

この一報が入ったのは平成二十三年一月二十六日の午後で、職員は小中合同の職員会の最中でした。窓から西側を見ると、今までに経験したことのないほどの噴煙が学校の上空にせまって恐怖を感じました。その日以来、数ヶ月間は学校も教育委員会や町の方針に従い、噴火や灰に対する対応策や生徒の安全を確保するための検討をしたり、情報を収集したりと、まさに未経験の事態が日々続きました。

その中で、今回の噴火災害で生徒の命（安全）を守ることに保護者（地域）との連携を図ることの大切さと必要性を改めて強く感じました。

噴火後、町教育委員会からの指導により、災害（噴火）マニュアルを作成しましたが、どんな時間帯に起きるのか、どの程度の災害かを想定して計画を立てないと本当に使えるものにならない事を実感しました。そこで、作成後に小学校との連携、PTAとの連携等について見直しを行い、連

絡体制や避難場所、指示体制を検討しました。

しかし、その後も各公民館との連携等や登校できない状況時の対応など、早急に、整備したりしないといけない課題も出てきました。

これらを解決することで、新燃岳噴火後に起きた東日本大震災や原発事故で見られた「想定外」という事態だけは避けられるように町の指導の下で学校・家庭・地域が一体となって取り組んでいかななくてはならないと考えています。

合い言葉は万全を期して「想定外はなし」です。



保護者の部

新燃岳噴火の教訓をいかして

高原小学校 保護者 九嶋 正人

「おはよう。」今朝も子ども達が、ランドセルに防災ヘルメットを吊り下げ登校する。普段と変わらない光景の中に、白煙をあげている山がある。

平成二十三年一月二十六日に、数十年ぶりに爆発的噴火をした新燃岳だ。

あの時を振り返ると、噴火のたびに家を揺らし、山の方から黒い噴煙が稲妻を放ちながら空を覆った。夜になると、噴火口からの赤いマグマしぶきが見え、一晩中「ゴォーゴォー」と不気味な音が鳴り響かせ「ガタガタ」と窓を揺らした。そして、大量の降灰で数メートル先が見えないほど視界を遮り、町全体を灰色に飲み込み大きな被害をもたらした。子ども達が外で元気に遊ぶ姿も消えた。登下校は保護者が車で送迎し、マスク・ヘルメット着用が当たり前となった。皆が、降灰で心身ともに悩まされ、いつまた起こるか分からない噴火と噴石、雨が降れば土石流など、子ども達と一緒に、先の見通しが立たず不安な日々を過ごした事を思い出す。

今は、子ども達が校庭で秋の運動会に向け練習に励むほど、噴火以前の生活を取り戻した。

これは、地域住民の頑張りや全国各地からのボランティアなど、多くの方々の温かい支援があったからこそ、今がある。私達は、絆と感謝の気持ちを忘れてはいけない。

新燃岳の火山活動は今も続いている。また、国内では東日本大震災や台風十二号などで、大勢の尊い命を奪い壊滅的な被害を出している。自然災害は防ぐ事ができない、私達の生活は常に自然災害と隣り合わせなのだ。

あらためて防災意識の向上が欠かせない。



新燃岳噴火を通して学んだこと

高原小学校 保護者 森 正明

今回の新燃岳の噴火は、私の人生の中で、初めて自然の脅威を直接肌で感じた時間でした。とはいえ、それは、今だに終息したわけではなく、その途中である事を、自分自身が、たまに忘れていた事に、この文章を書きながら気づき、反省しています。

新燃岳の噴火する前に出ていた水蒸気を、家から見ながら、いつかは噴火するのかなと思うぐらいだった気がします。

本格的な噴火の時、風向きが違う事で、私の家、会社には灰が降らず、噴き上がる噴煙の高さ、量を見ながら、正直こっちに來たら大変な事になると思っていました。

そして高原町に灰が降った時、一面の灰を見て、不安を感じた事を覚えています。その後、家の周りや工場、製品の灰の除去におわれました。

灰の影響で小学校が休校になったり、給食を作れなかったり、登下校も送り迎えになったりしました。それでも学校での学習が出来たのは、先生

方やボランティアの皆様のおかげでありがたいと思いました。

私がPTA会長という立場になって以降、先生方が、どう考え、いざという時のためにどのような対応をしようかと真剣に対策を考えている事を知る機会が多くなり、安心して学校に行かせる事が出来ています。

噴火という災害を通して、自然の脅威を知るとともに、日本中からの励ましの言葉や、支援物資のありがたさや、毎日のように灰の除去をしていただいたボランティアの皆様方に感謝してもしきれない事がたくさんあります。感謝の心を再確認するとともに、他の災害の時には、自分達の出来る事を協力していこうと思います。

東日本大震災で被災された方々のためにも、直接現場に行く事はできないかもしれませんが、できる支援を続けて行こうと思います。



一・二六を振り返って

高原小学校 保護者 日隈 宏子

改めて当時を振り返ってみても、私自身は灰の被害を受けただけで避難をしたわけでもないし、役場の職員の方々やボランティアの人達のように骨身を削って動いたわけでもない。たまたま親戚が避難対象地域で我が家に避難をしていて、その大変さや、父が区長をしている関係で、行政から住民へのつながりがいかに大事かは間近で見えました。

二十八日の朝、灰色一色の世界に驚きながらも三日後、従姉妹から「ほほえみ館」に避難したと聞くまでは、そこまで事態がひどくなつたとは思いませんでした。深夜に避難勧告が出て、睡眠薬を服用しているお祖母さんをたたき起こして避難所に向かうのは、とても大変だったというところででした。別れてから、我が家に避難すればとひらめいて、従姉妹を探して「ほほえみ館」へ。そこは、いつもの「ほほえみ館」ではありませんでした。避難してきた人々であふれ、疲れ果てぐったりしていたり、役場の職員が入所確認をとったりと戦場のようでした。そんな中、やっと従姉妹

を見つけ我が家への避難。従姉妹は猫を飼っているので家族同様の猫も避難してきました。父は役場からの文書や救援物資が大量に増え区長職に追われる日々が続きました。もちろん避難地域の区長はこの比ではないと話してくれました。避難先が分かっている家、分からない家と所在確認が大変なのだそうです。従姉妹は班長さんに連絡し、郵便物は住所変更の手続きを出し、自宅の玄関には避難先を貼り付けてと抜かりなくやっています。

全国からの支援物資や義援金が分配され始め火の恐ろしさを忘れそうになっていますが、悔しい事に新燃岳は今も噴煙を上げ続けています。大自然に人間は成す術もありません。一・二六を忘れたらいけないと思いつながらも平常の生活に戻った今、この日常が長く続くようにと願わずにはいられません。

新燃岳噴火を通して学んだこと

高原小学校 保護者 西川 嘉一

今回の噴火で自分たちの危機感のなさを感じました。一月二十六日噴火した時、そんなに長くは続かない位の気持ちで降灰、噴石の事などあまり意識がありませんでした。

深夜、「地震、何。」

長時間に渡り空振・地鳴りがあり、外に出ると、空が赤く染まり火柱が見え、その時に初めて、

「この先どうなるのか。」

と危機感を覚えました。子供は、この光景を目の当たりにして恐怖を感じていました。私は職場が高原であり、その日の朝、降灰があり、前が見えなく大変な事態がおきていました。この時、避難に対しての意識も少なく、防災に対しての家庭での準備をしていなかった事を反省しました。この噴火を通して子供達へ噴火に対しての知識を教える事、危険性を伝える事ができました。また、高原の町へたくさんさんのボランティアの皆さんが降灰処理、義援金、支援物資を送ってくれる姿を見て勇気づけられました。

今は、山の方も落ちついていますが、土石流の

危険性、また、大噴火の恐れもあり、いつ噴火するか分かりません。今回の噴火で私たちに危機感がなかった事を反省して、災害がおきた時にすぐに対応できるようにしていきたいです。また、子供達の心のケアも努めていきながら、噴火や災害の知識を伝えていく使命もあり、たくさんの方が支えあって応援、支援している事も話していきたいです。



新燃岳噴火を体験して

広原小学校 保護者 水町 恵理子

平成二十三年一月二十六日、新燃岳が五十二年振りに爆発的噴火をしました。山を見ると、もくもくとした噴煙が上がり、火口からは溶岩の塊が吹き上がり、正にこの世の終わりの様な光景が起こっていました。そしてその夜、窓ガラスがバタバタと空振を受け、びっくりし、山を見ると赤いマグマが吹き上がり、火山雷がはっきり見え、恐ろしく心配で眠れない夜を過ごしました。

噴火が頻繁に起こり、職場に行くと駐車場は噴石で敷き詰めたようになり、辺り一面灰色、車で走ると前の車が巻き上げた灰で視界が悪くて怖いくらいでした。

私の家も、地面は灰、噴石、硫黄臭い、外で遊べない、洗濯物が外に干せない、子供達の学校の送迎、太陽光パネルが破損、雨樋に灰が詰まる、思いもしない事が数多く起こりました。洗濯物は主人に室内干し場を作ってもらおう事で解消できましたが、それ以外は防ぐ事が出来ませんでした。いつもと違う生活にストレスのかかる日々です。

そんな時、桜島も噴火しました。新燃岳の噴火でこの生活がいつまで続くのかと思っっています。鹿児島の人達は桜島との生活を何年も過ごしている大変さを実感しました。

色々と考えさせられる時期に、全国各地から沢山の支援物資（食料品やマスク）が高原町役場、小学校を通して届きました。正直、心中を氣遣って頂ける気持ちに感謝しました。

口蹄疫、鳥インフルエンザ、新燃岳の噴火と天災の被害を受ける頃、東日本大震災が起こりました。その後、福島原発の影響は計り知れなく、自然の怖さを痛感させられました。

新燃岳の噴火後、親子共々防災への意識が高まり、自分の身や家族を守りたいと強く思いました。また、ボランティア活動をする人を見て、出来る事を自分から進んで実行する子になって欲しいと思います。

新燃岳噴火で感じたこと

広原小学校 保護者 末永 恵治

広原小学校校庭から見える高千穂峰は、裾野を広く持ち、どっしりと構えていて、いつの世も広原の子ども達を優しく見守っているように見えます。この高千穂峰と同じ霧島連峰にある新燃岳が、五十二年ぶりに爆発的噴火を起こし、私たちが忘れかけていた自然の脅威を呼び覚ましました。

度重なる噴火による降灰は、私たちの生活を脅かし、不便なものへと変えていきました。道路や屋根等へ降り積もった灰の除去作業は、簡単なものではありませんでした。また、子供たちの登下校は、噴火が激しい間は、保護者による送迎が実施されました。小康状態となつてからは、安全確保のため、町からヘルメットが貸与され、それを着用しての登下校となつており、今も継続中であり、給食室は、粉塵対策のため、隙間への目張り工事が実施されております。風向きによっては、広原地区も大きな被害が出るのが予想される状況にあり、未だに予断を許さない状況であります。

しかしながら、この噴火災害は、私たちに自然

の脅威の外に、人々の優しさを再認識させてくれました。消防団による警ら活動は、私たち住民を安心させてくれるものでした。また、全国からの支援物資等も多く寄せられ、特にマスクの配給は、子供たちを降灰被害から守るため大いに助かりました。

このように多くの人々の善意により、私たちは、復興の歩みを始めることができました。私たちが受けた人々の善意に応えるためにも、自然に対し畏敬の念を抱き、いつの日か恩返しをすることを誓うものであります。



新燃岳の噴火を体験して

狭野小学校 保護者 春口 茂子

新燃岳は、今まで生きてきて、忘れることが出来ない体験をさせてくれました。

一月二十六日、仕事場である狭野小学校に出勤する際に、新燃岳に見入ってしまいました。近頃、硫黄の匂いが気になり、職場でも新燃岳の話がつきなかつたので、毎日見ながら出勤するのが日課のようになっていました。

一月二十六日の朝の噴煙は、今までとは違い、煙の量が多いように思いました。その日は、さすがに外仕事をしながら新燃岳の噴煙が気になつて、仕事も手につかず、山を観察してしまいました。昼から外の掃除をしていると、今までに聞いたことのないドーンという音を地響きと共に体に感じました。

何が起きたのだろう。「まさか？」と思い、新燃岳に目を向けると噴火しているので、驚いて慌てて事務室の先生を呼びに行きました。それから、他の先生や子どもと新燃岳に見入ってしまいました。まさかの噴火で、鳥肌が立ったのを覚えています。今までは、新燃岳から狭野小学校まで

の距離を考えたことはなかつたのですが、凄く近く感じました。

噴火の様子を見てみると、山が怒っているかのように、噴火口から黒い煙と共に、噴石が飛んでいるのが肉眼でも十分見えました。黒煙が最高の高さまでいったと思ったら、風と共に都城方面に噴煙が流れました。その際、雷光を発しながらテレビで見た他所の火山の噴火の様子と全く同じでした。まさか、自分の生きている間に、しかも十数キロしか離れていないのに噴火を目の当たりにするとは、考えた事ありませんでした。

今回、新燃岳の噴火に遭遇して自然の凄さを体感し、生活で大変な事も経験しましたが、けが人も出ず、東北大地震に比べると、まだかわいいものだと子どもにも話しました。支援物資を頂き、恩を忘れず自分たちに来れることはしていかうと思いました。



新燃岳と私たちの暮らし

狭野小学校 保護者 加世田 隆宏

高千穂峰の自然豊かな中で育ち、子供達は狭野小学校で伸び伸びと学校生活を送っていました。しかし、今年一月、突然家中が揺れ、外に出ると、夜中に赤い火柱を立てて、新燃岳が噴火しているではありませんか。祖父と共に啞然と立ち尽くすばかりでした。子供達も何が起こったのか分からず、翌日に噴火の事を話しました。

狭野小学校の一部に避難勧告が発令され、学校も休校。この先、一体どうしたらよいのか、どうなるのか、噴火が続くのか、大人の私達も不安な思いがいっぱいでした。そして、高原小学校で授業再開ができることになり、子供達も新しい環境に少しずつ慣れてきました。

数日して狭野小学校がどんな状況なのか気になり、子供と一緒に教室や体育館をのぞくと、火山灰で覆われており、とても勉強のできる状況ではなかったと思いました。また、いつまでこの状況が続くのだろうかと心配でした。もしも避難勧告が解除されたら、ここに戻り、一日も早く子供達の笑顔がみたいと思いました。

狭野小学校での授業再開の為に、保護者、先生方、そして多くのボランティアの協力をいただき、校舎の外はもちろん、教室の中、あらゆる所の灰を除去及び清掃作業を行いました。みんなの力によりきれいな教室になりました。

また、いろいろな方々からの支援物資もいただきました。本当に人と人のつながりの温かさが伝わってきました。感謝してもしきれません。

現在、ヘルメットとマスクが通学の定番スタイルになりました。三月には東北の大震災があり、自然の怖さを本当に思い知らされました。今は新燃岳の噴火だけでなく、火山灰に土石流の心配もあります。自然の美しさ、時に見せる怖さ、共に高原町の今を全て受け止めて、小学校生活を送らせてあげたいと思います。

新燃岳の噴火が家族の絆、人と人の輪、いろんな事を気づかせてくれたと思います。

新燃岳の噴火を経験して

狭野小学校 保護者 古川安代

私は、高原町を見下ろすようにそびえ立つ霧島山を、生まれてから毎日見てきました。狭野に嫁いでは、もつと近くで見えてきました。

けれど、連山の中の新燃岳が一月二十六日の朝から煙が出るので、

「今日はヘンだなあ。」

と思いつつ一日を終える時、その怖い日はやって来ました。自然豊かな山から、私達を飲み込まんばかりの煙や火を噴く姿。慌てて家の中へ子供達と駆け込み、その日が無事過ぎるよう祈りました。しかし、そんな日が幾日と続き、不安いっぱい過ぎる毎日でした。

そんな中の避難勧告！子供達はランドセルを背負い避難を、まるでテレビで見るような光景が、我が家や避難所で見られ、「どうなるの？」でした。幸い私の実家が近くにあり、そこに一時身を寄せました。学校も休校になり、ますます不安でしたが、高原小へ一時引っ越しになり、子供達の賑やかな声を聞き、また、沢山の人からの励ましの言葉や支援物資を送ってくれた人たちの気持ちなど

で、元気ができました。学校や地区の人とも連絡が取れ、話を聞くことができ、更に安心できました。そんな中の、避難一部解除と狭野小の再開！学校には沢山のボランティアの方々が来てくださり、狭野に賑やかな子供達の声が響き、嬉しかったです。

新燃岳の噴火の時、励ましてくれた私の弟夫婦が、茨城で東日本大震災を経験しました。助けにはいけず、歯がゆい気持ちでしたが、電話で連絡を取り合い、新燃岳の時もらった元気をこんどはこちらから送りました。

新燃岳は、今は緑も少しずつ戻って来ているように見えます。これからは、新燃岳がもう少し静かに見下ろしてくれると嬉しいです。

半年以上が過ぎ、あの時の怖さは残っていますが、新燃岳の噴火で、経験できない怖さとともに人の温かさを、経験出来たことは、私ばかりではなく、子供達もすぐ大切な経験ができたと思っています。

まさかの避難：

後川内小学校 保護者 春山 小織

「今すぐ来て！」浅い眠りについた頃、枕元の携帯が…。狭野の実家の母からだった。

時計を見ると、零時三十分を過ぎた真夜中。新燃岳噴火による避難勧告が発令された直後の一月三十一日の事だった。

息子の寝顔を確認し、すぐに家を出た。途中から見える山は、噴煙を上げゴーゴーと赤く燃えている。「これは映画や夢じゃないんだ」と、心の中で何度も叫んでいた。

実家に着くと、近所中の人々が避難の準備で慌ただしく動いていた。

「家が無くなったらどうしよう…」
荷物を抱きかかえ、泣き出した娘を

「何バカな事言ってるの！」

と笑い飛ばした。心配させまいと強がったものの、心の中は不安と恐怖で一杯だった。

班長だった両親は地区の人とほほえみ館に避難し、娘だけ後川内に連れて帰った。くり返す空振りに怯え、なかなか寝付けなかった。避難所に何度か足を運んだが、食糧や支援物資が有り余るほど

届けられ、シャワーやテレビも設置されていた。体調を損なうことなく一週間余りで避難生活を終え、帰宅した両親を見て安堵した。これも多くのボランティアの方々のおかげだと深く感謝している。

その後、取材に訪れた某テレビ局の方たちが数時間にわたり、庭の片づけを手伝って下さった。人の優しさ、思いやり、助け合いの心をつくづくと感じた。

今年になって、地震や台風による最大級の被害が続き、日本中を震撼させている。これらの被害に比べれば、家族や家を失う事もなく幸いだったと思う。

しかし、まだまだ安心はできない。噴火だけでなく、地震や台風による災害も十分にあり得ることだ。万が一に備え、自然災害への万全の準備を…。



荒ぶる山の麓にて

高原中学校 保護者 黒木 将浩

「これは、自分の知っている霧島山ではない：。」
平成二十三年一月二十六日、暮れなずむ穏やかな空に、あたかも、のた打ち回る生き物の如く吹き上げられる噴煙を、為す術もなく呆然と眺めた。

噴火当時、私は、勤務先の霧島東神社にいた。空振に揺さぶられる建物から出て空を見上げると、手を伸ばせば届きそうな所を膨れ上がっていき噴煙が、忽ちに青空を覆い尽くし、やがて、噴石が降りはじめた。かつて経験したことのない不気味な恐怖を感じた。

往古、山麓に住み暮らす人々にとって霧島山は、時に、噴火を繰り返す荒ぶる神であり、時に、田に引く水を分け与える恵みの神であった。これが霧島山に対する尊崇の原点となる。やがて、荒ぶる噴火の度合いが減り、恵みの神としての霧島山の存在が大きくなっていった。現に、私たちも、朝日を浴びて色濃く輝く山に清々しさを感じ、夕焼けに浮かび上がる美しい山容に見入って、雄大で穏やかな山と認識していた。

噴火の後、「人間の傲慢に対する制裁」と唱えた人もいたが、その言葉こそが人間中心であり、傲慢そのものであると思う。もし、自然に意思というものがあるとすれば、自然の中のほんの一部でしかない人間など、意に介さない。山は自然の営みの中で噴火したのであり、そこから何かを学ぼうとする謙虚さが、その一部分である私たちには必要なかもしれない。

今回の経験を通して今更ながら感じた自然の奥深さ、他人と助け合い分かちあうことの尊さ、普通に暮らすことのできる有難さ、これらを、いかにかみ砕き、いかに活かし続けていくかが、肝要だと思う。

これまでも、そしてこれから、この山の麓で生きているのだから。



避難生活を通じて

高原中学校 保護者 福丸 恵子

今年一月三十日午後十一時過ぎ、避難勧告の連絡を受け、まとめていた荷物を持ってほほえみ館に避難しました。避難した夜は一睡も出来ず、不安ばかりで一夜を過ぎた事が、今でも頭の中に残っています。また、避難場での役場の方やボランティアの方々の心遣いや懸命に支援してくださる姿に本当に感激しました。

避難して二日後、長女の私立高校入試があり、入試を目前にした避難は本当に大変で精神的に不安な状態となりました。私たち夫婦は、長女の気持ちや落ち着かせる為にも、私の実家の須木に避難しよう…と考え、三日間ほど実家に寝泊まりし、長女も落ち着いて高校入試を終える事ができ、どうにか無事に合格できました。

その後も避難生活は十日程続きました。畜産を営む義父母は牛の避難も考え、出産を数日後に控えた牝牛一頭だけを残し、二十頭程の牛を市営牧場へ避難させました。毎朝毎夕、餌をやりに行っていました。疲労といつまで続くのか先の見えない牛の避難など不安が大きかったのか、義父の

表情は固く暗く、口数までが少なくなりました。私たち夫婦は、どうにか父を元気づけようと色々考えましたが、私たち夫婦には声をかける事しか出来ませんでした。

数日後、避難解除となり、大きな被害もなく私たち家族は家に帰る事ができましたが、家の中は灰で真っ白で、何年も住んでいなかった家のようになっています。三カ月程過ぎて、義父母の飼っている牛もやっと、家に帰ってくる事ができ、義父にも笑顔が戻ってきたように思えました。

今では田植えも出来て、田んぼにはきれいな稲穂が実っています。

いつまで続くかわからない新燃岳の噴火で心配は絶えませんが、東北の方々の避難や被害にあわれた方々の思いに比べれば、私達のほほえみ館への避難は恵まれた避難だったように思います。

これから先、どのような天災が起こるかわかりませんが、一日一日、一人一人を大切に過ごしていきたいと、避難を通じて感じさせられました。

新燃岳噴火を通して感じたこと

高原中学校 保護者 酒匂 みどり

平成二十三年一月、新燃岳は普段の美しい山から一変し、重々しい地響きと黒い煙の中に不気味な赤い火柱をのぞかせる恐ろしい山となってしまいました。

私が住んでいる地区は避難指定区域ではありませんが、自分で済むことができませんでした。しかし、職場の同僚や友人家族等を含む沢山の方々、ほほえみ館での避難生活を余儀なくされました。ダンボールの仕切りの中に毛布を敷いて寄り添っている姿を目の当たりにし、心が痛む思いでした。こんな時に何を手助けしたらよいのかと思いつつも、普段通り仕事をしている自分が腹立たしくも思われませんでした。義援金箱を見つづける度に小銭を入れたり、職場での寄付に協力したりするだけでした。友人や同僚に何かできることはないのかと声をかけるだけでした。テレビで日々放映される全国各地からのボランティアの方々には、本当に頭が下がります。また、子供達の学校には全く知らない学校のたくさんの生徒さんから励ましのメッ

セージが届いており、校内に掲示されていました。きっと子供達もたくさんの勇気と元気を頂いたことと思います。親としても感謝の気持ちで一杯でした。

また、大量の火山灰を前にただただ怨めしい思いしか出て来ないのに、最近のニュースで火山灰を利用した陶器や野菜作りに取り組んでいらっしゃる方を拝見しました。発想の素晴らしさと、前向きさに驚くばかりでした。

このように、人間とは自然の力の前には本当に無力なんだと思う反面、人間の底力や優しさの素晴らしさを今回の経験を通して強く感じました。三月には東日本大震災というとてもない大災害が起き、現在も苦しんでいらっしゃる多くの方々の姿を新聞やニュース等で毎日のように目にしています。その度に目頭が熱くなります。やはりここでも近隣の方々や助け合い、家族の絆によって一層強く生きていらっしゃる姿や明るく前向きに頑張っている子供達の表情等、やはり人間ってすごい力を持っているのだと、家族や人との繋がりがあって大事なのだと感じています。この気持ちを忘れず、一日一日を大切に過ごして行こうと思います。

新燃岳噴火を通して感じたこと

高原中学校 保護者 増田 悟

一月二十六日夕方、新燃岳の大規模な爆発がありました。都城にいた自分は、一メートル先も十分に見えない状況で、何が起きたかと不安になったことを覚えています。高原へ帰る道は大渋滞で、降灰のため前がはっきり見えませんでした。そのとき、小石くらいの噴石が飛んできて、車のフロントガラスに当たる音を聞き、大丈夫かなと思いつながら運転していました。

高原に着くと灰が降っていませんでしたが、大きな揺れと音に、ただただ驚くばかりでした。夜中になると激しい揺れで目がさめ、道路に出て新燃岳の方を見ていると大きな火柱があがり、空から雷が山の噴火口に落ちる光景は、この世のものとは思えないようなものでした。

ニュースを見て、改めて事態の大きさがわかりました。それから、幾度となく大きな噴火を繰り返し、大量の火山灰が降り、高原町の綺麗な街並みも灰色一色になり、すごく憂鬱な気分になりました。避難をされている方々にとっては、とてもきつい毎日だったと思います。

そういう中、高原町民や役場の方々の復興の願いが、灰の除去作業になり、一人一人が、必死に取り組んでいきました。

また、全国からボランティアの方々がこの高原にきて、灰の除去などの作業を手伝っていただきました。縁もゆかりもないのに、高原町に来てくれて、困っている人たちを助けようと思う気持ちに感謝しています。自分だけでできないことも手を差し伸ばしてもらったことで、みんなで頑張ろうとする気持ちが強くなったと思います。復興へ向けた活動を通して、元氣と勇氣をもらった気がします。

今は、前のような美しい高原の街並みです。しかし、いつ新燃岳のような大きな爆発があり、景色が一変するかわかりません。でも、この地で共に生活している人たちがいて、温かい心で見守ってくれる人が全国にいるということを思うと、以前より安心した気持ちで高原に住むことができます。

新燃岳噴火を通して学んだ事

後川内中学校 保護者 田中 美香

一月、突然の噴火とともに空全体を覆うような黒煙は、初めて見る光景で、大変不気味な感じがしました。その日から噴火は続き、灰が積もり、子供達は外にも出られず、登下校は送り迎えとなりました。

降灰は長い間続き、土石流の心配や、灰の除去作業など大変重労働でした。また、降灰による農作物の被害は大きく、町全体がとも落ち込んでおりました。そのような時に、多くの方々からの励ましの言葉や、たくさんの方の支援物資には、元氣と勇気をいただきました。心配してくださる方が、日本中にたくさんいらっしゃるという驚きと、ありがたいうちという気持ちでいっぱいになりました。町民、皆、元氣づけられたと思います。

今までの自分を振り返ってみますと、他県の災害などを、テレビの中の出来事として、かわいそうだな、と思うくらいで何もしていなかったように思います。

今、日本は、東日本大震災や台風災害などで、多くの方が苦しんでおられます。自分出来るこ

とは、小さいことかもしれませんが、助けていた
だいたお返しが、少しでも出来ればと思います。

まだ、噴火は終息しておらず、子供達の登下校
もヘルメットが手放せません。もしもの時の避難
方法など、常に考えておく事が大切です。また、
子供達とも日頃から話し合っておかなくてはなら
ないと思っております。

早く、安心して暮らせる生活に皆が戻れる事を
願います…。

頑張れ高原！ 頑張れ日本！



地域
の
部

情報の時代

北狭野区 石橋 峰晴

いつも地震や大雨の被害などの報道を見るたびに、高原はたいした災害もなく良い所だなど思っていました。今回の新燃岳の噴火で昔の噴火の事を思い出しました。私が六、七歳の頃、大噴火をおこし、灰が降って空が真っ暗になり、傘をさした事を覚えています。昔の事で情報もなくほんとうに大変だったのではなかったかと思います。現在では、全ての情報が瞬時にわかるような時代です。

そのおかげで新燃岳の活動が、最近になって活発になっていった事は知ってはいましたが、まさか噴火するとは考えてもいませんでした。

噴火は一回でおさまると思っていましたが、さらに夜になると火口付近は真っ赤に染まり、今にも大爆発を起こすのではないかと思うくらいでした。夜中になり、家のサッシや障子がガタガタと揺れて、いっこうに止む気配もなくなりました外にとび出しました。

あとから分かった事ですが、これが空振だったそうです。一人暮らしの方や高齢者の方々にとっ

ては、まさに恐怖であったのではないかと思えます。この時ほど情報があつたらなと思つたことはありません。噴火はおさまる気配もなく、初めての避難指示が出され私たちは、ほほえみ館に避難しました。避難生活は初めての経験でしたが、地区別に避難場所を変更してくれとか、色々の意見もありましたが、私はよかつたと思います。それぞれが助け合つてこそ絆が生まれると思います。

また、全国の方々からの援助や応援に感謝したいと思います。今回、特に感じたのは、一人暮らしの高齢者の方々への対応だと思いました。地域ぐるみで対応していく必要があると思います。全国からボランティアの方々がかけて、私の家も屋根の清掃をしていただきました。ほんとうに頭のさがる思いです。自分にこんな事が出来るだろうか、しっかりと心にきざんでいこうと思います。

新燃岳大噴火に半世紀振りに遭遇して

南狭野区 児玉 アツ子

平成二十三年一月二十六日午後三時過ぎ、家の裏の畑で作業中、突然山が噴火し西の空一面に噴煙がもくもくと立ちこめ、今にも天からおそいかかってくるように思えて怖くなりました。しかし、まわりに近隣の人が数名いたので、少し気持ちほ落ち着きました。その後、不安を抱きながら夕方には家に入り、いつものとおりに就寝しましたが、夜半十一時を過ぎたころ、突然、家中の障子や窓がすごい音を立てて、しかもゴーゴーと地鳴りがして大噴火がおきました。怖くて外へ出て山を眺めると、新燃岳の前にある矢岳の真上から火柱が立ち上るのが見えました。近くの南狭野区活性化センターに行ってみると、すでに情報収集に区長をはじめ五、六名の人が待機されていました。このとき新燃岳の際の木々が噴石により山火事になってるのが見えました。

この状況に不安を抱きながら、しばらく山を眺めた後、自宅に戻り、眠れぬままいると午前四時ごろ空振も止んだように思えました。しばらくして一人暮らしをされている方が心配になり

ました。さぞ不安がっているのではと思い、電話連絡をすると、「怖くて避難する準備をしている。すぐ迎えにきてほしい。」とのことでした。直ちに車で訪問し、本人を車に同乗させ、南狭野区活性化センターに行きました。区長に相談すると、避難場所はほほえみ館になっているとの事で、すぐほほえみ館に向かいました。避難所へ着くと、すでに皇子原地区他十四、五名の人が避難しており、すでに災害対策本部が設置され、役場職員から毛布や非常食、飲物等を手際よく準備していただきました。お陰で、全員が一安心した様子でした。

朝になると、皇子原地区の人達が一人、二人と家に帰宅され、祓川の一人暮らしの男性と私達三名のみが残留となりました。

この後、一月三十日夕刻、再び爆発的大噴火がおき、狭野地区、花堂地区その他危険区域住民約五百名位は、災害対策本部からの避難勧告により、ほほえみ館、神武ホール、旧体育館に収容され、冬季の一番寒い最中にもかかわらず、通路にまで支給された毛布を下に敷いて、不安の一夜を過ごしました。この時、避難した人々があまりにも多い人数でしたので、職員もパニック状態で一部ト

ラブルもありました。しかし、各方面からの救援物資、色々な飲食店の方々が、直接避難所を訪れ、温かいうどん、豚汁、おにぎり、その他の炊き出しをしていただいたことなど、最高のおもてなしで、大変感謝し、避難所で受けた御厚意は忘れがたい思いです。

私は数年前、役場に臨時職員としてお世話になった時期があり、知人も多く、また地域の人々も大半が顔見知りで、避難された方の相談に対応しました。不安を柔らげたり、的確にアドバイスができたこと、一人暮らしの方のお手伝いをしながら職員の方と協力し役立てられたことなど、自画自賛の思いです。二月五日、災害対策本部より一部避難解除が告げられました。しかし、新燃岳の噴火は継続中で、今後も危険な状況であるので、十分注意するよう告げられました。私は高齢者や病弱な一人暮らしの人五十名余りの方のお手伝いとして一緒に留まることにしました。この間、噴火が沈静化したとき、自宅周辺の降灰状況やペットの猫も心配で様子を見に帰宅しました。

ある日、再び大噴火をしました。噴火が静まってから帰宅しようと、車で避難所を出て駅前を通行中、車の天井に噴石がパラパラと落ちる音がし

ましたが、大丈夫だろうと車を走らせました。農協の前にさしかかった時、今度はバリバリともものすごい音がして恐ろしくなり、避難所へ引き返しました。二日後、車のフロントガラスに長い亀裂が入り、直ちに整備工場にて修理交換し、避難所に戻りました。改めて噴石の怖さを感じました。

二月十五日になって災害対策本部より、全面避難解除と発表になりましたが、新燃岳の地底のマグマの動きは危険な状態なので、今後も十分気を付けるよう告げられ、不安の中での解散でした。

過去、昭和三十四年二月二十二日、新燃岳が噴火した時も午後三時ごろと記憶していますが、今度の噴火は前回とは比較にならないほどの爆発的噴火で、恐怖のなか避難し、多くのことが初体験のことばかりでした。これまでも色々な自然災害に遭ってきましたが、これを機に日頃から防災に、避難訓練や非常時の準備に心掛け、地域の人達と常にコミュニケーションをとり、今回得た知識や経験を生かし、人命救護を重視し、早めの情報収集に努め、迅速に行動すべきと感じました。

教育委員会
の部

噴火体験を通して

高原町教育総務課 久保田 光信

私が新燃岳噴火を体験するのは二度目である。一度目は五十二年前、私が小学一年生のときであった。だが、今回の爆発は連続しての爆発で長期に渡っており、五十二年前とは規模も大きく様相が違う。

また、今回の大爆発は、町教育委員会職員として仕事で関わりを持つこととなった。自らも車には非常時に備えて衣類、貴重品等を常に積み込んだまま数日間、家族とともに避難所に通って生活する中での勤務であった。

教育委員会としての噴火に対する対応は、一月二十七日夕刻、空一面を覆い尽くす程の噴煙に包まれて、部活動等で学校にいた児童生徒を緊急に下校させるとともに、緊急校長会を開いたのを皮切りに、このあと、児童生徒の授業、通学の安全確保等、様々な対応に追われることとなった。

二十七日深夜から翌二十八日未明まで絶え間なく続いた空振とともに、夜空に赤々と吹き上げる噴石、閃光は初めて目にするものであった。夜が明けると一面灰まみれの高原町となっていた。当

然、学校も休校となった。その後の給食も調理場の灰侵入を防ぐための工事完了までの数日間、簡易給食を強いられることになった。各学校とも降灰の中を朝夕の保護者送迎での学校生活が続いた。特に狭野小学校は、二週間の高原小学校の間借り授業を余儀なくさせられた。

また、県教育委員会からも本町教育委員会へ二名の応援の常駐職員や、子どもものの心のケアのため臨床心理士の派遣を受けた。他にも多種多様の対策、取り組みがとられる中での学校運営だった。

このような中で、各学校にも全国から多くの救済物資、義援金、励ましの手紙等いただき勇気づけられた。また、学校の環境整備、復興にあたり、各層からのボランティアの人々にも大きく支えられた。

今も子どもたちはヘルメット着用しての登下校が続いているが、今回の噴火は子どもたちにとって生活環境の変化など、様々な苦難があった。反面、自然の脅威、人の善意、共存する心等、高原の子どもだけが味わった貴重な体験でもあったと思う。体験したことを通して、大人になったとき、まさに高原が、こころの原風景になってほしいと思う。

新燃岳噴火災害対策等に携わって

南部教育事務所 副主幹 小島 敏郎

「かけがえのない子どもたちの生命を守ること
を常に最優先に考え行動しなければならぬ。」

平成二十三年二月七日から高原町教育委員会に
派遣され、高原町の災害対策及び復興に向けた
様々な取組を経験した私自身が学んだ教訓です。

この経験の中で、子どもたちの生命を守るため
には、次の三点が更に大切だと感じました。

一点目は、「迅速な対応」です。降灰の被害が
最も大きかった狭野小学校を高原小学校に素早く
移転されました。生命に危険が迫ると判断された
場合には、速やかに避難し安全を確保することが
最重要であることを再認識しました。

二点目は、「綿密な連携」です。教育委員会及
び高原町内の各小・中学校並びに高原高校との連
携体制が確実に築かれていました。学校長の参集
が大変素早く、よりよい方法を考え発展的な意見
を次々に協議して前進していく姿を見て、このよ
うな体制を常日頃から築いていく必要性を感じま
した。

三点目は、「想定外への想像力」です。噴火が

収まりかけた後、心配されたのが土石流でした。
たとえ少量の雨でも、土石流の発生を想定し、危
険な事態を避けるための方法等を想像する力をも
ち、「想定外でした」という最悪の結末にならな
いようにすることを痛切に感じました。

今回の噴火災害では、尊い人命が奪われること
がなく幸いでした。今後、噴火災害のみならず、
ゲリラ豪雨、スーパー台風、巨大地震等による災
害への対策を常に考えていくこと、今回の貴重な
体験を風化させずに後世に引き継いでいくことを
最重要課題として、これからの職務に当たりたい
と思います。

結びに、どうか、新燃岳の火山活動が終息しま
すように、そして、高原町の子どもたち及び保護
者並びに地域の皆様が平穏に暮らせますように心
より願っています。



写真集

しんもえだけふんか
新燃岳噴火



←◎ 噴火

へいせい ねん がつ にち すい
平成23年1月26日（水）に、
しんもえだけ ふんか
新燃岳が噴火し、たくさんの火山
ばい ふんせき ふ
灰や噴石が降りました。
ふんえん じょうくう
噴煙は、上空1500メートルま
あ
で上がりました。

ねん だいふんか
52年ぶりの大噴火だったん
だよ。

あと なんかい おお ふんか
この後、何回も大きな噴火が
お 起こって、たくさんの町民の
かたがた かん こうみんかん
方々が、ほほえみ館や公民館に
ひなん
避難したんだ。



↓ ◎ 火柱と火山雷

へいせい ねん がつ にち もく よ なか しんもえだけ ふんか
平成23年1月27日（木）の夜中、新燃岳が噴火
あか ひばしら かざんらい たかはるちょうやくば
しました。赤い火柱と火山雷が、高原町役場から
み おお じ な ひび
見え、「ゴォー」という大きな地鳴りが鳴り響いていました。



しんもえだけふんか
新燃岳噴火



← ◎ 噴火の様子 (狭野小学校より)
 しんもえだけ もっと ちか さのしょうがっこう
 新燃岳から最も近い狭野小学校で、
 どう かあ たち かざんばい そう
 お父さんやお母さん達が火山灰の掃
 除をしているときに、噴火しました。

↓ ◎ 噴火の様子 (広原小学校より)
 しんもえだけ ふんか ひろわらしょうがっこう
 新燃岳の噴火は、広原小学校からも
 み
 見ることができました。



↓ ◎ 噴火の様子 (高原中学校より)
 ふんか ようす たかはるちゅうがっこう
 噴煙は、大きな音ととも
 ふんえん おお おと
 に、空高く上がりました。
 そらたか あ
 たかはるちゅうがっこう ふんえん
 高原中学校からも、噴煙
 み
 がはっきり見えました。

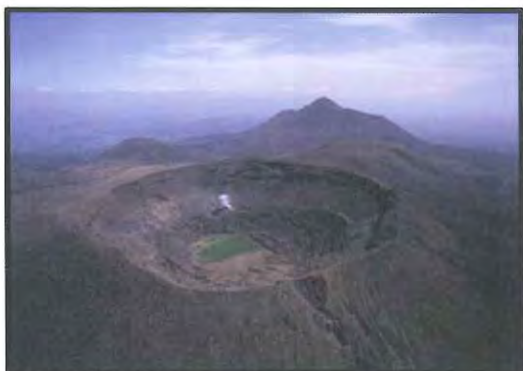


↓ ◎ 噴火の様子 (都城市より)
 ふんか ようす みやこのじょうし
 みやこのじょうし み ふんえん
 都城市から見た、大きな噴煙
 ようす
 の様子です。



(写真:都城市危機管理課提供)

しんもえだけ か こう
新燃岳火口



ふん か まえ ちゆうおう 火口湖
噴火前 (中央にエメラルドグリーン
が見えます)



しんもえだけ ふん か まえ あと
新燃岳が噴火する前と後
では、違う山に見えるね。

これは、噴火したときの火
山灰の影響だね。



ふん か ごと 火口 溶岩
噴火後 (火口に溶岩がたまっているのが見えます)

しんもえだけふんか ともな こうはい
新燃岳噴火に伴う降灰



← ◎ 降灰の様子
 新燃岳の噴火は、たくさんの火山灰を降らせました。
 田畑に降りつもった火山灰に
 よって、農作物はとても大きな被害を受けました。

まだ、収穫されていない
 たくさんの野菜などが、火山灰の被害を受けてしまったんだね。



→ ◎ 降灰の様子
 牛が食べる飼料にも、火山灰が降りつもっています。

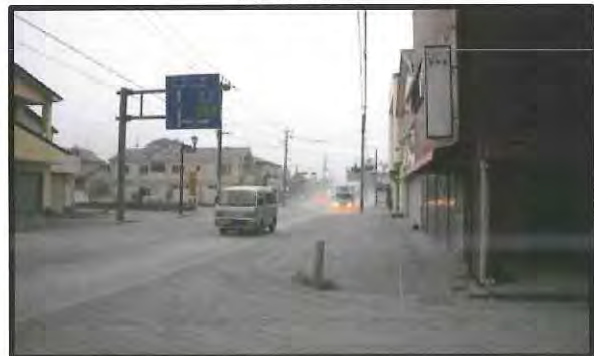


↓ ◎ 降灰の様子
 新燃岳が噴火する前と、噴火した後の町の様子です。道路にたくさんの火山灰が降りつもり、車がライトを点けています。

ふんかまえ
 (噴火前)



ふんかご
 (噴火後)



ど せきりゅう たいさく
土石流への対策



じよせき さぎょう
◎ 除石作業
やま ふ かざんばい
山に降りつもった火山灰が、
おおあめ どせきりゅう と
大雨で土石流になっても止めら
れるように、さぼう どしゃ
砂防ダムの土砂を
じよきよ
除去しています。

どせきりゅうたいさく
↓ ◎ 土石流対策
ふ かざんばい ど ゆうこうかつよう どせきりゅう と
降りつもった火山灰を、土のうとして有効活用し、土石流を止
めるための対策をしています。(写真は、祓川地区)
たいさく しゃしん はらいがわちく



ひなんじょ
避難所



かせつぶろ せっち
(↑ 仮設風呂の設置)



ほほえみ館^{かん}や、神武^{じんむ}ホール、中央^{ちゅうおう}公民館^{こうみんかん}などが、避難所^{ひなんじょ}となったんだ。仮設風呂^{かせつぶろ}や、段ボール^{だんぼー}の仕切^{しきり}が設置^{せっち}されたけど、避難^{ひなん}した町民^{ちやうみん}の方々^{かたがた}はとても大変^{たいへん}な思い^{おも}をしたんだよ。



ボランティア



たくさんのボランティアの方が、
がっこう かざんばい そうじ
 学校の火山灰を掃除してくれたんだ
 よ。窓にテープを貼っているのは、
ふんか まど は
 噴火のときに起きる空気の振動（空
しん せんどう ぐう
 振）で、ガラスが割れないようにし
 ているんだ。



たかはるちよう し えん
 高原町への支援



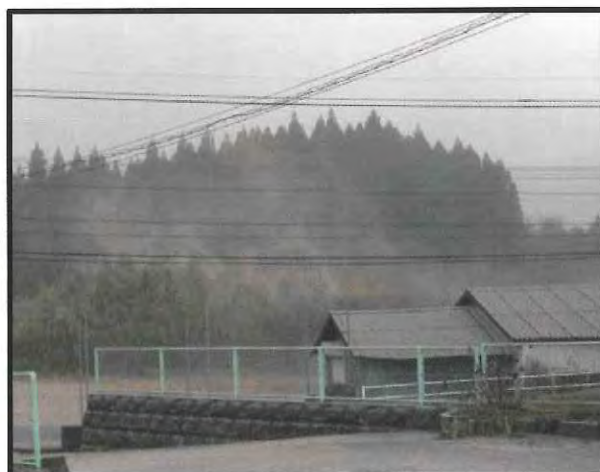
しんもえだけ ふん か たかはるちよう こま
 新燃岳が噴火して、高原町のみんなが困ってい
 るときに、ぜんこく かたがた し えん
 ただき、励まされました。優しくて温かい気持ち
 に、たかはるちよう ゆうき
 高原町は勇気づけられました。



たかはるしょうがっこう ようす
高原小学校の様子



ひろわらしょうがっこう ようす
広原小学校の様子



さ の し ょ う が こ う よ う す
狭野小学校の様子



うしろかわうちしょうがっこう ようす
後川内小学校の様子



たかはるちゅうがっこう ようす
高原中学校の様子



うしろかわうちゅうがっこう ようす
後川内中学校の様子



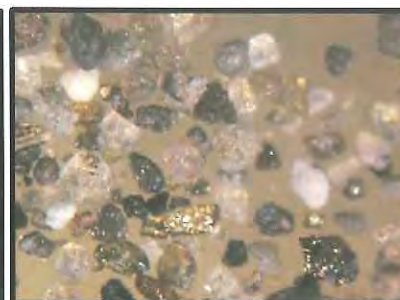
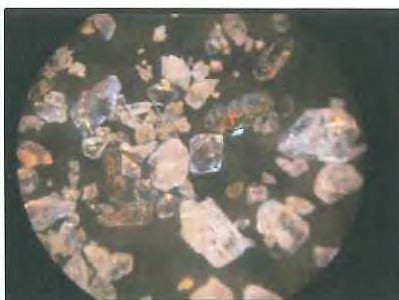
たかはるこうとうがっこう ようす
高原高等学校の様子



とうげこうようす
登下校の様子



ふんせき ひがい
噴石・被害



◎ ふんせき ひがい
噴石・被害
しんもえだけ ふん か ふ ふんせき
新燃岳の噴火で降ってきた噴石を、
えんだま くら おお
1円玉と比べてみると、大きいこと
がわかります。けんびきょう かんさつ
顕微鏡で観察すると、
いろいろ かたち おお
色々な形や大きさのものがああります。



しんもえだけ ふ
新燃岳から降ってきた
ふんせき くるま まど
噴石は、車の窓ガラスを
わ つよ ちから
割ってしまうほど強い力
があるんだね。

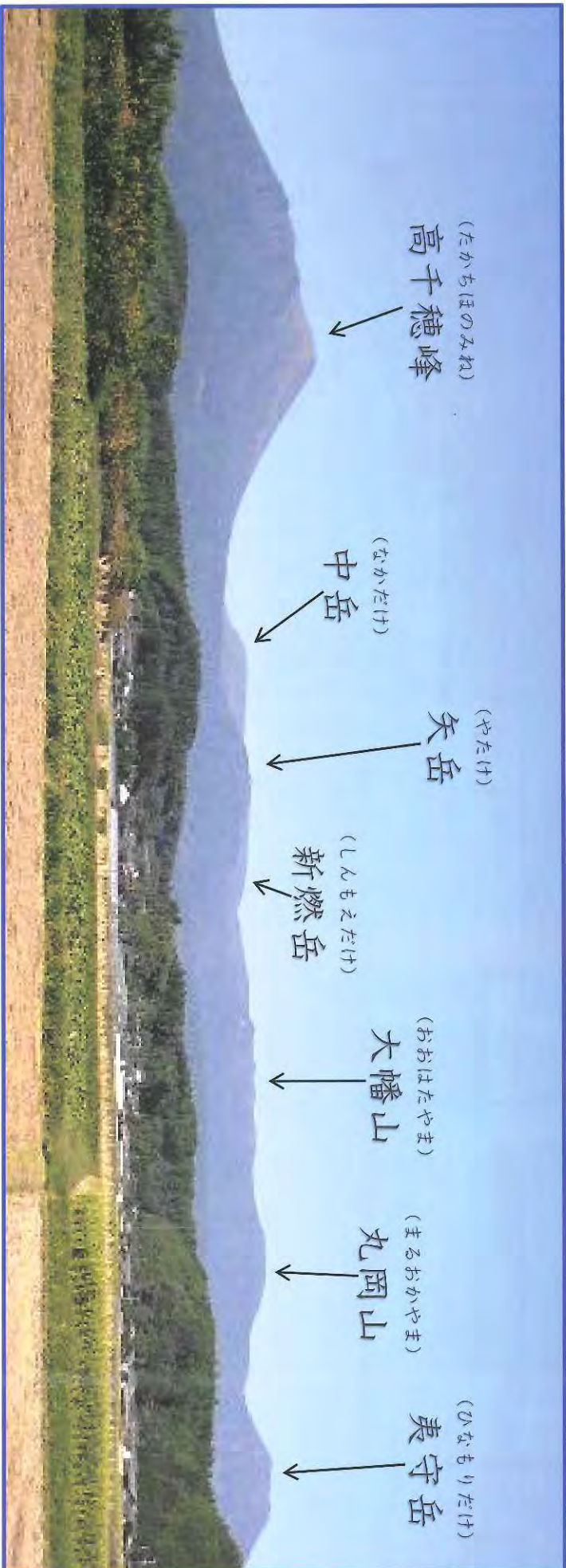
ふん か
噴火したときは、ヘル
メットをかぶって、あんぜん
なところ 逃げ
な所へ逃げましょう。



霧島連山
きりしまれんざん



高千穂町から見ることで霧島連山は、こんなにたくさんあるんだね。みどり豊かで自然に恵まれた町であることがわかるね。自然の持つ力がとても強いということを忘れずに、そして、大切な自然をみんなで守り育てていこうね。



高千穂峰
(たかちほのみね)

中岳
(なかだけ)

矢岳
(やたけ)

新燃岳
(しんもえだけ)

大幡山
(おおはたやま)

丸岡山
(まるおかやま)

夷守岳
(ひなもりだけ)

ちやう がっこう たいおち
町や学校の対応

ねんがつひ 年月日	しんちえだけ しじょう 新燃岳の状況	ちやう がっこう たいおち 町や学校の対応
H23.1.26	ふんか ふんえんこう 噴火(噴煙高1500m)	たかはらちやうさいかいたいさくほんか かつち 高原町災害対策本部を設置
H23.1.27	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高2500m以上)	
H23.1.28	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高1000m以上)	ちやうないしやうちゅうがっこう こう ちやう ちやう 町内小中学校(6校)臨時休校
H23.1.30	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高不明)	ひなんかんこくはつれい 避難勧告発令
H23.1.31		たかはらしょうがっこう さのしょうがっこう たかはらちやうがっこう りんじ 高原小学校、狭野小学校、高原中学校が臨時 休校
H23.2.1	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高2000m以上)	さのしょうがっこう たかはらしょうがっこう あきまじつ しやう 狭野小学校は、高原小学校の空教室を使用 し授業を再開(～10日) ちやうないしやうちゅうがっこう かきん ばいほうじんたいさく こさじ 町内給食調理場の火山灰防塵対策工事を 実施
H23.2.2	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高2000m以上)	
H23.2.3	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高1500m)	たかはらしょう ちやうがっこう 高原小・中学校のグラウンド降灰除去を 実施
H23.2.4		たかはらちやうがっこう ちやうがっこう ちやうがっこう 高原中学校、後川内小・中学校のグラウン ド降灰除去を実施
H23.2.5		ひなんかんこくいちふかいこさ 避難勧告一部解除
H23.2.10		ちやうないしやうちゅうがっこう こう しょうせい と およ せいしよくじん 町内小中学校(6校)の児童生徒及び教職員 へ防災ヘルメットを配布(～24日)
H23.2.11	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高2500m)	
H23.2.14	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高不明)	さのしょうがっこう じこう じやうさうさいかい 狭野小学校が自校にて授業再開
H23.2.15		ひなんかんこくぜんめんかい 避難勧告全面解除
H23.2.16		ちやうないしやうちゅうがっこう こう ちやう ちやう ちやう 町内小中学校(6校)及び関係機関へ「火山 ふんか ちやうがっこう たいさく 噴火災害対策マニュアル(高原町教育 委員会)」を送付
H23.2.18	ぼくはつてきふんか ふんえんこう 爆発的噴火(噴煙高3000m)	

新燃岳火山活動の歴史

- 1716年 3月11日 : 2カ所から噴火。噴火は水蒸気爆發。
- 1716年 11月 9日 : 周囲15kmの地域内の数カ所から噴火。
火砕流が発生。死者5名、負傷者31名、神社・仏閣消失、消失家屋600軒余り。牛馬405頭死亡。
- 1717年 2月 7日 : 噴火が2月7日～10日まで4日間続く。
- 1717年 2月13日 : 9時から12時にかけて噴火が発生。その間に付近の田畑粗粒火砕物で、10cm～20cm埋まる。2月17日～21日まで連続して高温の火砕物の降下。
- 1717年 9月19日 : 火砕流発生。1716年3月からの噴火で最大規模。
- 1771年～1772年 : 水蒸気爆發で始まり、その後、火口内に溶岩がせり上がって溶岩湖を作り、火砕流が発生した。
東方では熱い降下火砕物によって山火が発生したと考えられる。
- 1822年 1月12日 : 現在の霧島市からの記録では「1月12日の朝にまず白煙が上がり、夕方になって噴火が激しくなる。」1月17日には新燃岳の7～8合目に新しい火口が4カ所あった。
- 1959年 2月17日 : 14時50分に爆發的噴火が発生。小林市、高原町、霧島市では噴石、降灰多量、森林、耕地、農作物に被害大。
- 1991年 11月13日 : 新燃岳直下で地震急増、26日まで多発。同時に微動多発。92年1月まで連続微動状態。11月24日新燃岳火口噴気活発化確認。91年12月～92年2月まで、時々火山灰噴出。
- 2008年 8月22日 : 小規模噴火。小林市方面へ降灰。
- 2010年 3月30日 : ごく小規模噴火。4月17日、5月27日にごく小規模噴火。高千穂河原で降灰を確認。

(気象庁ホームページより)

「新燃岳噴火 百人の記録」編集委員会

編集委員	高 田 靖 史	後川内小学校	教頭
〃	濱 砂 智 子	高原小学校	教諭
〃	園 田 祐一郎	広原小学校	教諭
〃	奥 一 浩	狭野小学校	教諭
〃	壺 岐 成 久	高原中学校	教諭
〃	深 江 理 恵	後川内中学校	教諭

事務局（教育総務課）

内 村 宗 則	課長
野 脇 浩 文	教育対策監
久保田 光 信	課長補佐
松 枝 るり子	学校教育係 副主幹
森 山 浩 一	学校教育係 主任主事

新燃岳噴火 百人の記録

発 行 平成 23 年 11 月

発行所 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓 392

高原町教育委員会

教育長 江 田 正 和

印刷所 宮崎県西諸県郡高原町大字後川内 18-2

株式会社 長崎印刷

高原町 ^き 徽章 (昭和37年4月20日告示)



- ・高原の「高、を「ハル、のかな文字で囲んでいます。
- ・配色は文字は白色、文字間は濃紫と定めています。
(白は純粋潔白を意味し、紫は質実剛健を意味する)
- ・図案の考案者は、野田典男画伯(東京都在住:高原町狭野出身)です。

高原町 町旗 (昭和48年7月24日告示)



- ・配色は生地色は緑、章色は黄と定めています。
(絵画の世界では、緑は「知性」「理性」「感性」を表し黄色は「崇高な美」を表すとされています。)